

# 唐宋時代に於ける福建省の開發に關する一考察

北山 康夫

福建省開發の歴史に就いては既に桑原・市村・和田の諸博士、及び青山定雄氏の研究されたところであるが<sup>(一)</sup>、私はいまこれら先學の驥尾に付して、時代的には略々唐の中葉から宋にかけての時代をとり、主としてこれを経済的方面より考察を試みたい。蓋し、これら先學の研究は或は唐の中葉に至るまでの歴史であるか、或は主に文化的政治的方面の考察に限られてゐるやうであるが、寧ろ福建省の開發が劃期的なる進展を見たのは唐の中葉から宋にかけての時代であり、又文化的開發の根柢として經濟的方面の考察が必要であると思はれるからである。さて福建省は地理的には、東は海に面し、西は高峻な

る仙霞嶺山脈を負つて江西・廣東兩省と境し、又南北共に一帯の山地を以て廣東・浙江の兩省と境してゐる。<sup>(二)</sup>さればこの地の最も便利なる交通路は海上よりのそれであるが<sup>(三)</sup>、これも海岸に山脈追つて所謂典型的リヤス式海岸をなし、内部は海岸線に沿うて幾多の山脈が幾重にも起伏してゐる。かく外部との交通が甚だ不便である上に、その地味は頗る礫礫である。従つてこの地の開發は頗る遅れ、寧ろその南方の廣東地方の方が南海貿易等の關係もあつて早くより開發せられ、この地方は長く化外の地として取残された貌である。さてこの地は、秦の始皇帝の時、はじめて閩中郡が置かれたといはれるけれども、それは實質的なものではなかつたらしく<sup>(四)</sup>、ついで漢の武帝も亦この地方を平定し

たけれども、叛服常なくして間もなくその民を江淮地方へ移したといはれる。降つて三國の吳は建安郡を置き、彼の南支那開發に一時期を劃したところの晉室の南渡と共に、この地にも開發の餘波の及ぶものがあり、北方の名族林・黃・鄭・陳の四姓がこの地に移住した。その後南北朝時代に於ても、徐々に開發されたであらうけれども、唐の高宗の儀鳳元年(六七六)、諸蠻の侵寇に備へて漳江の北に屯田兵が置かれたといはるゝに徴しても、唐初に於ける開發の狀況が推測に難くない。唐の徳宗・憲宗頃の人、杜佑の着すところの通典卷二百八十二にも、尙福建を化外の他として、

閩越阻僻在一隅。憑山負海。難以德撫。

と記載されてゐる。ところが安祿山の大亂の後、北支那の地は戰亂に寧日なく、難民は揚子江を越えて陸續として南支那の地に移住し、かくて唐の中葉より福建省はかゝる難民の避難地として劃期的なる發展をとげた。このことは最も端的に人口の増加として數字に現れてくる。

いま隋唐宋三代の人口を擧げて見ると、

隋大業二年(六〇六)、戸 一、二四二〇(隋書地理志)

唐天寶元載(七四二)、戸 九、〇七〇六(舊唐書地理志)

宋元豐初年(一〇七〇)、戸 一〇四、四二二六(元豐九域志)

となるのであつて、天寶元載より元寶初年に至る間に實に十一倍餘の激増振りを示してゐるのであつて、この増加率は當時の他の地方のそれに比べて、又福建省の從來のそれに比べて、全く群を抜き劃期的なるものである。かくて唐の中葉より北宋にかけての福建省の開發は自覺しきものがあり、唐代杜佑によつて「難以德撫」と述べられたが、宋史地理志では、

福建路蓋古閩越之地。其地東南際海。西北多峻嶺抵江。王氏竊據垂五十年。三分其地。宋初盡復之。有

銀銅葛越之産。茶鹽海物之饒。民安土樂業。川源浸灌。田疇膏沃。無凶年之憂。而土地迫蹙。生籍繁夥。雖磽确之地。耕耨殆盡。畝直浸貴。故多田訟。其俗信鬼尙祀。重浮屠之教。與江南二浙略同。然多嚮學。喜講誦。好爲文辭。登科第尤多。

と記載されてあつて、殆んど開發し盡されたかの觀があ

る。かくて宋代には福建省より多くの著名なる政治家・學者を輩出し又建安は當時の印刷業の中心地となり、廉價なる福建本は天下に徧しと稱せられ<sup>(七)</sup>、泉州に於ける南海貿易は廣東をも凌駕せんとするの繁昌振りを示すに至つた<sup>(八)</sup>。

さてかくの如く福建省開發の進展を見たのは、この時代に於ける南支那開發の趨勢に應ずるものであり、唐初より浙江省南部の地が殆んど開發し盡され、漸くこの地に及んだものであるけれども、とにかくこの地方がこの期間にこれだけの人口包容力を増加したのは、畢竟するに、それは、その土地の利用が進展したことに歸せなければならぬ。然らばその土地の利用は如何なる形態をとつて行はれたであらうか。

註

(一) 桑原博士、歴史上より見たる南北支那(東洋文明史論叢) 市村博士、唐以前に於ける福建及び臺灣に就いて(東洋學報八ノ一)

和田博士、秦の閩中郡に就いて(東洋史研究一ノ五) 青山定雄氏、隋唐宋三代に於ける戶數の地域的考察(一)

唐宋時代に於ける福建省の開發に就いて(北山)

(二) 歴史學研究六ノ四・五) 尙日比野丈夫氏は最近、唐宋時代に於ける福建の開發(東洋史研究四ノ三)を發表された。

(三) 仙霞嶺山脈を越えて福建に入る道路は仙霞關と杉關とである。仙霞關は浙江省江山縣の南百支里のところであり、浙江省と福建省とを結ぶ最も重要な道路であつて、唐の乾符五年(八七八)黃巢はこの道を開いて福建に入り、次いで南宋の紹興年間(一一三一—一一六二)史浩といふ人が更に之を修理した。この通路によるときは錢塘江の舟運を利用して浙江省江山縣の南十五支里のところにある清湖渡まで漕り、そこからは舟を棄て、陸路仙霞關を越えて福建省に入り、福建省浦城縣城の西より又閩江の舟運をかつて福州に出るのである。杉關は福建省光澤縣の西北九十支里のところであり、江西省と福建省を結ぶ最も重要な通路であつて、元の至正十九年(一三五九)陳友諒はこゝを通つて福建に入り、明の太祖も亦こゝより入つて陳友諒を伐つた。而してこの道は先の仙霞關に比べて一層短直で之を越ゆることが容易である。

(四) 和田博士前掲論文。  
(五) 成田節男氏、宋元時代の泉州の發達と廣東の衰微(歴史學研究六ノ七)

青山氏前掲論文に詳細なる地域的增加の表がある。就いて参照せられたい。

(六) 青山氏前掲論文、歴史學研究六ノ五、六八頁。

(七) 石林燕語卷八に、

今天下印書以杭州爲上。蜀本次之。福建最下。京師比歲印板殆不減杭州。但紙不佳。蜀獨福建多柔木刻之。

取其易成而速售。故不能工。福建本幾徧天下。正以其易成故也。

といつてゐるのは、北宋末期の状況で、その質からいへば杭州・蜀・福建の順であつたが、その最からいへば福建が第一であつた。而して福建印刷の中心地は建安であつて、こゝには宋元明三朝を通じてその名を恣にした余氏の勤有堂があつたのである。

(八) 桑原博士、宋末の提擧市舶西域人蒲壽庚の事蹟、及び戚田節男氏前掲論文。

二

福建省に於て肥沃なる平野を求むるならば、先づその閩江・晉江・漳江の下流域の地を擧げなければならない。

然しながらこれらの海岸地方は、彼の有名な杭州の觀潮によつても知られるやうに、潮汐干満の差の著しいところであつて、海岸地帯に於て良田を得るためには防波隄の設備が必要である(一)。この防波隄が隄・塘といはれる

ものであつて、福建省沿岸いたるところに發達した。例へば閩縣の東五支里のところにあつた海隄は、唐の太和三年(八二九)令李茸の築くところであつて、これによつて毎年六月潮水のために枯死してゐた作物が救はれ、三百の民戸は良田を得、又長樂縣の東十支里のところにあつた海隄も亦太和七年(八三三)同じく令李茸の築くところであつて、以て潮を防ぎ又十の斗門を設けて、旱ならば水を蓄めて灌漑し、雨降らば水を洩らして、以て良田を得たといはれる。又塘も福建省沿岸至るところに發達したが、就中その大規模なものは泉州のそれであつて、その數四十七を數へ、その中東一支里にある尙書塘は貞元五年(七八九)刺史趙昌の築くところであつて、漑田三百餘頃に及んだ(二)。これらによつても推測せらるゝやうに、隄も塘も同じく海岸に發達した防波隄であつて、大きな河口にあつて河川を溯る潮流を防ぎ、又流れ來る水を蓄へて附近の田に灌漑したのである。

次に隄塘に類似して、又別の機能をもつものに埭ダイといはれるものがある。これは河水を堰き止めて附近の田

に灌漑すると共に、又水運の便をも兼ね備へたもので、水位を異にする二水路間に設けて、轉軸を利用して人力又は畜力を以て舟を引き上げ又は引き下げるものであつて、小規模なるインクラインともいはるべきものである。

これも亦大河の上流下流至るところに發達したが、就中泉州に於ては外國貿易が盛んであつた丈けに最も整備し、泉州附近では九十四を數へたが、中でも煙浦球が最大で、上九十九溪の水を受け、廣袤五六支里に及び、泉州の水田三分の一はその水を仰いでゐるといはれる<sup>(三)</sup>。

以上は主に海岸地帯に於て發達する灌漑設備について述べたのであるが、その奥地では又一種獨特の灌漑設備が發達してゐる。元來この地方の河川は多く溪の名を以て呼ばれてゐるやうに、多くは短直にして急流であるのが特色である。加ふるに山地は多く花崗岩よりなり、禿山が多くて河川が枯渴し易い。例へば閩江の如きも、淫潦のときには波濤洶湧として勢地を震はす如きであるが、一旦旬日も雨が降らないときは、水涸れて狹淺のところは囊を囊けて渡ることができる程である<sup>(四)</sup>。されば

流域の地に灌漑するためには、平時より蓄水以て旱魃に備へなければならぬのであつて、これが先に述べた隄塘であり、陂であり湖である。

大體中南支の地方は、錢塘江を境としてその北は太湖附近の低濕地であるが、その南は山地であつて、自らその灌漑形態も異つてくる。即ち太湖附近では、クリーク・圩田・圍田等排水に最も意を注ぐのであるが<sup>(五)</sup>、錢塘江以南では寶文閣待制李光が、

明越之境皆有陂湖。大抵湖高於田。田又高於江海。

旱則放湖水溉田。澇則決田水入海。故不爲災。文獻

通考卷六

と浙江省明(寧波)越(紹興)地方の灌漑について述べてゐる如く、蓄水に最も意を注ぐのであつて、これは又福建省についても同じである。かくてこの地方では、到るところに陂湖が發達する。例へば福州の西南三支里にある西湖及び東北三支里にある東湖は、晉の大守嚴高の築くところであつて、その西湖のへでも溉田千五百頃に及び、又泉州の南には八十二の陂があり、その溉田面積も甚大

なものであつたであらうと思はれる。

さて陂といふのは、漢書卷二十九溝洫志の陂山に顏師固が注して、「陂山因三山之形也。」とか、「過三山之流以爲陂也。」といつてゐるやうに、山間の溪流を堰き止めて湖としたものであるが、こゝに興味あることは、福建の對岸臺灣の灌漑形態がこれに類似することであつて、臺灣ではこれを埤圳と呼んでゐるが、埤は陂と音が同じであり、圳は支那でも陂より田に水を導く用水路をこの名で呼んでゐる。いふまでもなく臺灣本島人の多くは福建より移住したものであるから、彼等はその故地に於ける灌漑設備を又その移住地に於ても用ひたわけである。

以上私は福建地方に於ける灌漑の様式を概観したのであるが、古く漢の司馬遷は天下を周遊して後史記を著し、その河渠書の中で、關中(陝西省)の陸海となつたのは、秦代鄭國渠が開鑿されたにはじまり、又蜀の沃野となつたのは同じく秦代の蜀守李冰が蜀渠を開いたに由來するといひ、秦の天下一統の經濟的根據は鄭國渠にありと斷じた<sup>(七)</sup>。恐らく彼は滔々として灌漑する鄭國渠・蜀渠を

實見してこの結論に達したのであらう。福建に於てはその地形に制約されて、かゝる大規模なる灌漑設備は發達しなかつたが、到るところ小規模なる灌漑設備の發達を見た。大清一統志を見ると、これらの灌漑設備を施した人々のために祠廟を建て、奉祀してゐるのを散見するのであるが<sup>(八)</sup>、これによつて見ても如何にこれらの灌漑設備に依存することが大であつたかは想像に難くない。又これらの灌漑設備の多くが唐の中葉より北宋にかけて設けられてゐることは、この地方開發の歴史ともよく照應し、北方の戰亂を避けて南移した漢民族がその強靱なる生活力によつて孜孜として荒蕪地に灌漑し開墾したことを物語つてゐる。天寶年間に比して實に十一倍の人口包容量を有するに至つたことは、かゝる灌漑設備の發達にその根本的原因を求め得ないであらうか。

註

(一) かゝる防波隄の最大なるものとして有名なのは杭州のそれであつて、之は五代吳越王錢錫の設くるところである。

舊五代史卷一百三十三 錢錫傳には、

錫在杭州皇四十年。窮奢極貴。錢塘江舊日海潮遶州城。

鑿大庀工徒鑿石填江。

と傳へ、又宋代錢塘の人沈括著すところの夢溪筆談卷十  
一には次の如き興味ある話を傳へてゐる。

錢塘江錢氏時爲石堤。堤外又植大木十餘行。謂之泥柱。  
寶元(一〇三八一—一〇三九)・康定(一〇四〇)間。人有  
獻議取泥柱可得良材數十萬。統帥以爲然。既而舊木出  
水皆朽敗不可用。而泥柱一空石堤爲洪濤所激。歲歲摧  
決。蓋昔人埋柱以折其怒勢。不與水爭力。故江濤不能  
爲害。云々

と。尙詳しくは文淵學報第一期所載、吳越錢氏之文化。

(夏定城)を參照。

(二) 新唐書地理志卷四十一。

(三) 讀史方輿紀要卷九十九泉州府。

尙宋の天聖年間(一〇二三—一〇三二)より埭の代りにパ  
ナマ運河式の閘が設けられるやうになつた。閘は埭に比  
して一層便利であつて、夢溪筆談卷十二に、

淮南漕渠築埭以畜水。不知始於何時。舊傳召伯埭謝公  
所爲。按李翱來南錄。唐時猶是流水。不應謝公時已作  
此埭。天聖中監眞州排岸司右侍禁陶鑑始議爲復閘。節  
水以省舟船過埭之勞。是時工部郎中方仲荀文思使張綸  
爲發運使。副表行之。始爲眞州閘。歲省冗卒五百人雜  
費百二十五萬。運舟舊法舟載米不過三百石。開成始爲  
四百石船。其後所載浸多。官船至七百石。私船受米八

唐宋時代に於ける福建省の開發に就いて (北山)

百餘裏。囊二石。自後北神・召伯・龍舟・茶黃諸埭相  
次廢革。至今爲利。云々

と記してゐる。

(四) 讀史方輿紀要卷九十五

夫閘江本無正流。大約疏鑿山陔而成。上流地高水迅。  
易於淺涸。居民往往積石壅水。爲灌溉及水碓之利。山  
水驟發。輒衝激爲患。灘險比下流較多。其下流水勢益  
盛。灘益大而險。湓湑時波濤洶湧。勢若懷襄。旬日不  
雨則石埭磳磳。淺狹處可褰裳涉也。水口灘險已盡而列  
石江中參差數里。水勢震盪。勢猶洶洶。出水口則江流  
浩衍以風阻爲虞矣。

こゝに「居民往往積石壅水。爲灌溉及水碓之利」といふ  
のが即ち陂であり塘である。

(五) 圩田・園田については、玉井是博氏「宋代水利田の一特  
異相」(京城帝國大學文學會論叢第七輯史學論叢所收)を  
參照。

(六) 新唐書地理志卷四十一及び讀史方輿紀要福建、參照。

(七) 史記卷二十九、河渠書、

韓聞秦之好興事。欲罷之毋令東伐。乃使水工鄭國間說  
秦。令鑿涇水自中山西邸瓠口爲渠。並北山東注洛三百  
餘里。欲以溉田。中作而覺。秦欲殺鄭國。鄭國曰。始  
臣爲閘。然渠成亦秦之利也。秦以爲然。卒使就渠。渠  
就用注境閘之水。溉澤鹵之地四萬餘頃。收皆畝一鍾。

第二十四卷 第三號 九七

唐宋時代に於ける福建省の開発に就いて (北山)

於。是。關。中。爲。沃。野。無。凶。年。案。以。富。強。卒。并。諸。侯。因。命。曰。鄭。國。渠。云々

尙支那に於て灌漑の有する意義については歴代の正史の河渠志・溝洫志と共に、ウィットフォード著、平野義太郎監譯、「解體過程にある支那の經濟と社會」(上・下巻)及びチャオ・チン・テイ著、佐渡愛三譯、「支那社會經濟史分析」を参照すべきである。殊に後者に於て多くの斬新なる説を聞くことができる。

(八) 大清一統志

興化府卷三百二十七

李長者廟。在莆田縣南木蘭陂。長者名宏。侯官人。宋熙寧中(一〇六八—一〇七七)傾貲築陂以灌田。邑人德之。立廟祀焉。

建寧府卷三百三十一

趙清猷公祠。在崇安縣西營嶺。祀宋趙抃。趙抃は衢州の人にして、康定の初(一〇四〇)崇安縣の知となり水利事業を興した人である。

福寧府卷三百三十四

諫議大夫唐。在寧德縣靈童山。隋大業中(六〇五—六一六)諫議大夫黃鶴嘗憩山之荒壤爲田。鑿澗以灌漑之。民立祠祀焉。

三

第二十四卷 第三號 九八

明の顧炎武はその著日知錄卷十二に於て唐代の水利事業について、

歐陽永叔作唐書地理志。凡一渠之開。一堰之立。無不記之。其縣之下實兼河渠一志。亦可謂詳而有體矣。蓋唐時爲令者。猶得以用一方之財。興期月之役。而志之所書。大抵在天寶以前者居什之七。豈非太平之世。吏治修而民穩達。故常以百里之官而創千年之利。至於河朔用兵之後。則以催科爲急。而農功水道不暇講求者歟。然自大曆以至咸通。猶皆書之不絕於冊。而今之爲吏。則數十年無聞也已。

と論じてゐる。治水と灌漑とは支那に於ては最も重要な公共的事業であつて、それは南北支那を通じて農業經營に缺くべからざるものであり、古くより國家がこのこと如何に心血を注いだかは歷朝正史の河渠志溝洫志に詳細に傳ふところである。たとへば顧炎武も注意してゐるやうに歐陽修の著す新唐書地理志には各縣の下に、その地に於ける水利事業の狀況を記してゐるが、それらは多くその地に赴任した官吏の營むところである。とこ



るが、唐も安史の大亂以後は漸くかゝる官吏の指導による水利事業は減少し、その反面、これらの水利事業が地方有力者又は自治團體によつて營まれるやうになるのである。

福建省の開發が急激に進展したのは時恰も唐の中葉以後のことである。さればこの地の開發工作には官吏の活動より寧ろ地方有力者又は自治團體の活動に俟つところが多いのである。例へば寧德縣の赤鑑湖は宋代の里人林桂のつくるところであり、長樂縣の濱湖湖は唐の大曆中(七六六—七七九)里人林鸞のつくるところにしてその周圍千三百餘丈に及び、又同じく長樂縣の陳塘港は宋末陳文龍の築くところである。又北宋の熙寧年間(一〇六八—一〇七七)贊を傾けて莆田縣の木蘭陂を築いた李宏は廟を建て、祀られてゐる。而してこれら地方有力者の活動は單に灌溉水利の方面のみではない。桑原博士は泉州城の築造には賈胡簿錄の出資を仰いだことを指摘されてゐるが、福清縣の海口鎮も亦宋の里人林遷の築くところであり、又同じく福清縣で宋の里人王頭陀といふものが、

州の東五十支里にある王頭嶺を砌り開いて道をつけ、又泉州の東二十支里の洛陽江には萬安渡といふのがあつて、甚だ危險であつたが、宋の慶曆の初(一〇四一)郡人陳龍がはじめて石を敷き詰めて沈橋をつくり、次いで皇祐五年(一〇五三)更に郡人王實等が主唱して石橋を作りんとしたが成功しなかつた。偶々蔡襄といふ者が郡守となつて赴任するや慨然として之を成就し、その長さ三百六十丈、廣さ丈五尺に及び、大規模な石橋ができ上つた。恐らくこの王實の主唱したといふのは自治團體の活動を促したことであらうが、その他の例に於ても個人の活動による如く記載されてはゐるが、事實はその人の提唱により、自治團體の活動に俟つたものも多かつたであらうと思ふ。

さてこれらの事業が多く晉室の南渡と共にこの地方に移住した陳・鄭・黃・林の姓を有する人々によつて行はれたことも興味あることであるが、特に注意しなければならぬことはかくの如く福建の開發工作のあらゆる方面に地方有力者又は自治團體の活動の及んでゐることであ

る。顧炎武は唐の中葉以後國家の水利事業が少くなつたのは、専ら安史の大亂によるものとしてゐるが、然しその原因を更に追求するならば、之を社會の變遷に歸せねばならない。師ち唐の中葉までは官吏は均田制下の農民を自由に驅使して種々なる公共的事業を興すことができたのであるが、均田制の崩壞後はこれらの自作農の多くは莊園の持主である權門勢家の傘下に集つてその小作農となり、國家はもはやこれを自由に驅使することができなくなつた。かくて從來國家によつて營まれてゐた種々の公共事業は漸くこれら擡頭して來た民間の有力者又は自治團體によつて遂行さるゝことゝなつたのである<sup>(三)</sup>。

近世の支那は一國といふけれども、それは一つ一つの區別をなして居つて、それ丈で生命あり、體統ある自治團體によつて形成されて居り、救貧・衛生・教育・治安の維持、水利事業等百般の公共的事業はこれらの自治團體によつて營まれてをり、それが近世支那社會の一特質であるが<sup>(四)</sup>、その萌芽は唐末の頃から漸く見ることができるのであつて、かく考ふるときはかゝる一聯の現象は

社會變遷の様相を示現するものといはなければならぬ

註

(一) 桑原博士著「宋末の提擧市舶西域人請壽康の事蹟」九〇頁參照。

(二) 讀史方輿紀要自卷九十五至九十九卷福建。

(三) 濱口重國氏は唐代の兵制について、「徵兵制度でありかつは兵士の戰技訓練は農隙を以てし、平時は農民として田野に於て耕作に従事せるといふ仕組の兵制を指して、支那では兵農一致と名付けたのである。而して此制を完全に實施せんが爲には、兵士をして平時田野に散處せしめ得る様な兵制であることを必要とする外に、兵士の母體たる國民の殆んど大部分が農民、農民と云ふても自己の田畝を有しない小作農では駄目で自作農である事を、絶對的必要條件とするものである。云々」(史學雜誌、四十一ノ一二、府兵制より新兵制(二)と述べられてあるが、これはそのまゝ役法についてもいふことができるであらう。尙拙稿、宋代の土地所有形態(東洋史研究二ノ二)參照。

(四) 内藤博士著 支那論 内治問題。

同 新支那論 支那の政治及社會組織。

山田秀二氏 明清時代の村落自治について(三)(歴史學研究二ノ六)

(昭和十三年十一月東洋史談話會大會講演)  
昭和十四年五月十二日 補正。